

私が留学中(1962-63)に起こった最大のできごとはキューバ危機だった。日本からの来客を案内して国連の見学に行っていたら、ケネディー大統領の緊急放送があるというので、テレビのある部屋に案内された。3大ネットワークがすべて通常番組を打ち切ってホワイトハウスからの演説を放送していた。quarantineという言葉の意味が分からなくて、友達に聞かれても答えられなかったことを鮮明に覚えている。日常会話ではわからない言葉があれば、相手に聞けばすむことであるが、テレビではケネディー大統領に尋ねるわけにもいかない。

ケネディー大統領の演説はこの日も相変わらずカッコよく、決意が込められていた。しばらくするとテレビの解説やまわりの人々の会話から quarantine というのは海上封鎖であるということがわかった。ケネディー大統領は演説の名人で就任演説での名文句はよく知られていた。

And so, my fellow Americans: ask not what your country can do for you – ask what you can do for your country. My fellow citizens of the world, ask not what Americans will do for you, but what America will do for you, but what together we can do for the freedom of man.

トランプ大統領の粗野な言葉づかいにくらべても何と格調の高い演説だろうと、今思う。この演説にはさらに次のような言葉があった。

Let us never negotiate out of fear, but let us never fear to negotiate.

米ソ対立のなかで、キューバ危機を予測していたかのような言葉である。ヘミングウェイも愛したキューバはニューヨークから見ると目と鼻の先で、そこから大陸間弾道弾に積んだ原子爆弾をニューヨークに落とされれば、ニューヨークの街では広島をはるかに超える地獄絵が展開されることは誰の眼にも明らかであった。

公海上の海上封鎖は国際法違反だという人もいる。しかし、とにかくフルシチョフはキューバに大陸間弾道弾を運び込むことは断念して、船団は引き上げていった。反共の旗手アメリカ大統領はタフ・ネゴシエーターだったのである。フルシチョフがこの転進を国民にどう説明したのか、説明しなかったのか、それを私は知らない。

ソ連は1957年人工衛星スプートニクを打ち上げ、世界中を驚愕させていた。スプートニク・ショックでアメリカでは科学教育の遅れが指摘され、幼稚園から理科系の教育が見直されていた。アメリカも必死でソ連に追いつこうとしていたが、1962年の段階ではまだアメリカのほうが遅れていたかもしれない。フルシチョフは宇宙開発競争の優位性を利用して原子爆弾を運ぶ大陸間弾道弾の基地をキューバ作ろうとしていたのである。

1962年の秋、私はカナダとの国境に近いメイン州アンドーバーにある放送衛星テルスターの基地を見学に行ったことがある。紅葉が目にも染みた。アメリカとカナダの国境線は

確か北緯49度だから、秋は一度にやってきてすぐに冬になる。カナディアン・メープルの紅葉はその一瞬の輝きである。カナダの国旗はメープルであり、カナダに行けばフォードの自動車のステアリング・ホイールの中心にもメープルがついている。

アンドーバーの衛星追跡基地には大きなオウムガイのような渦巻き型の大きなアンテナがあって、それを放送衛星テルスターの動きに合わせて回転させて追尾する。放送衛星は大気圏外を回っているから地上か追いかける時間はわずか20分程度で地球の裏側に消えていってしまう。それでも1962年の段階でヨーロッパとの間で20分の番組を送受信することができた。

地球をとりまく大気圏は地球のまわり3万キロメートルから5万キロメートルに及んでいる。人口衛星はその大気圏の外を回っている。現在ジェット機が運航しているのが地上1万メートルから1万2000メートルだから、人工衛星を打ち上げるロケットはけた外れの推力をもっていることになる。

人工衛星を打ち上げることができれば理論上は地球上のどこへでも原爆を乗せて攻撃をしかけることができる。人工衛星はいったん大気圏の外に出て地球の周りを周回することになる。そこから大気圏内に再突入するとき大気との摩擦で燃え尽きない技術の開発が必要であるが、論理的にはいつでも、どこにでも地球上に原子爆弾を落とすことができる。放送衛星はそうした軍事開発の副産物であった。

現在の放送衛星は楕円軌道ではなく、地球上を円軌道で回っていて、その回る速度が地球の自転と同じになるように設計されているから、地球上からみると静止しているように見える。日本の放送衛星は東経135度の赤道上3万5000キロあまりのところに打ち上げられている。楕円軌道ではないからオウム貝のようなアンテナで追尾する必要はない。しかし、地球上3万5000キロに衛星を打ち上げるにはロケットの推力をかなりあげる必要がある。北朝鮮が現在打ち上げているのはロケットが一端大気圏に出て、弾頭を切り離して大気圏に再突入させるものである。キューバ危機のときは大陸間弾道弾を運んでいたのは船であったから海上封鎖することができたが、空中に壁を作ってこれを防ぐことは容易ではない。

私が日本に帰ってきて翌1963年にケネディー大統領の暗殺が日本に生で伝えられたのは、日本では初の衛星経由の放送であり、楕円軌道の衛星によるものであった。

1960年代のアメリカを語るのに避けて通れないのは公民権運動の高まりである。南北戦争(1861-1865)ではアメリカが合衆国(北部)と連合国(南部)に分かれて内戦を繰り広げた。それから百年たっても、現実には黒人と白人の関係は平等からはほど遠いものであった。1964年には公民権法案が成立した。北部では理念で運動を進めることができたが、南部ではプランテーション農業という奴隷制という社会経済構造と深くかかわった問題であった。

1950年代の後半から、アラバマ州モントゴメリーのバス・ボイコット事件、アーカンソー州リットルロックの高校での黒人入学拒否などが起こり、白人過激派による襲撃事件な

どが起こっていた。

ニューヨークでも affirmative action によって黒人地域の子供をスクールバスで白人地域に運んで共学させるといふようなことが行われはじめていて、賛否両論が戦わされていた。ハーレムではユダヤ人の店で日本製の電気ごてが売っていて、黒人がそれを買って縮れ毛を伸ばすのに使っていた。黒人の婦人雑誌にはなどには、コールド・パーマならぬコールドのぼし液の広告がやたらに目についた。アフロヘアーが流行し、黒人が black is beautiful と言えるようになり自信をとりもどすようになったのはずっと後のことである。リトル・ロック事件は大統領の命令で黒人の入学は認められたが、白人たちからの執拗ないじめは続いていた。

1960年代はアフリカの植民地が次々に独立した時代でもあった。アメリカにもアフリカからの留学生がかなり送られてきていた。しかし、彼らはアメリカの黒人にもなじめず、アメリカの社会にも違和感を感じている人が多かったようである。

ワシントン広場ではジョン・バエズのフォークソングが歌われていた。

We shall overcome someday

Oh deep in my heart

I do believe

We shall overcome someday

キング牧師を中心としたワシントン大行進では、キング牧師の名演説が残されている。

I have a dream that one day, this nation will rise up and live out the true meaning of its creed:

We hold these truths to be self-evident, that all men are created equal,

I have a dream that one day on the red hills of Georgia, the sons of former slaves and the sons of former and the sons of former slave will be able to sit down together at this table of brotherhood.

1960年代はアメリカで理想が語られた時代であった。しかし、アメリカが南北に分断されてもおかしくない時代でもあった。ケネディー大統領が暗殺され、キング牧師は1968年に暗殺された。1960年代のアメリカはまだ日本の幕末、桜田門外の変が起こった時代だったといえるかもしれない。黒人初の大統領バラク・オバマが生まれたのは2009年のことである。

【予告編】

第7話 帰国—日本文化圏再突入

第8話 アメリカ再訪

第9話 アジア回帰

第10話 アメリカNOW